



Title	神を見る“Star-Gazer” : Mason & Dixon における科学と宗教
Author(s)	石割, 隆喜
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2023, 63, p. 33-58
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91239
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

神を見る “Star-Gazer”

—Mason & Dixon における科学と宗教

石 割 隆 喜

「ポストモダン文学」の登場以来その代表的な書き手と目されてきた Thomas Pynchon だが、第1作 *V. (V.)* 以降、彼の「ポストモダン」な小説において一貫して宗教が果たしてきた重要な役割を無視することはできない。同作のタイトルともなっているイニシャルで “V.” とのみ呼ばれる女性は、歴史家 Henry Adams が 1900 年に至るまで西洋の人の心をもたしめて捉えつづけ、Chartres 大聖堂をその精華の一つとする文化的創造を駆動してきた “force” (Adams 1070) と見なした the Virgin の裏返し、陰画^{ネガ}であり、小説中、V は現代史における破壊と死すなわち “inanimate[ness]” (V. 20) を生み出す力そのものではないにせよ、その現場に現れる謎めいた “symptom” (V. 386) として描かれる。*The Crying of Lot 49 (CL49)* では、プリント回路のような San Narciso の街並みから Oedipa Maas が啓示を得ようになる瞬間には直截に “religious” (CL49 24) との形容詞が付され、*Gravity’s Rainbow (GR)* が西洋近代の歴史から暴き出す「選ばれた者／選びに漏れた者」という二分法 (“Are they Elect, or are they Preterite [. . .]?” [GR 110])¹ は Calvin 神学に由来する。*Vineland* の結末近く、Traverse 家と Becker 家の集いで、一族の長老 Jess Traverse は Ralph Waldo Emerson からの一節を読み上げるが、それは彼が William James の *The Varieties of Religious Experience* 中に引用されているのを見つけたものである (Pynchon, *Vineland* 369)。

ピンチョンの小説を特徴づけるこうした宗教性は早くから注目されてきた²。近年は、ポストモダン文学全般が宗教や信仰との関わりを指摘されるようになってきたが、そこにおいてもピンチョンはやはり中心的に扱われている。たとえば “postsecular” という観点からピンチョンにおける宗教性にアプローチする John A. McClure は、「ポスト世俗」の文学の特徴である “partial” な信仰がピンチョンにおいては「俗も聖も」という形で現れているとし、次のように述べる。“That his [Pynchon’s] approach incorporates both secular discourses (as Tom LeClair shows in *The Art of Excess*) and religious discourses (as Eddins shows in *The Gnostic Pynchon*) should make us suspicious of the secular/sacred dichotomy and give us a clearer sense of the hybrid discourses I am calling postsecular” (*Partial Faiths*

30). この「部分的」な信仰ゆえにピンチョンは “the most exciting religious novelist of our time” (McClure, “Postmodern” 153) とされるのである。また Amy Hungerford は 20 世紀後半のアメリカ文化における信仰の特徴を “belief without meaning” (xiii) としたうえで、ピンチョンの『競売ナンバー 49 の叫び』と『重力の虹』において「意味と信仰」が個人にとってもはや神と関わる問題ではなくなっていると指摘する (26)。

英国国教徒の Charles Mason とクエーカーかつ理神論者である Jeremiah Dixon を主人公とし、彼ら二人の “Party Chaplain” (MD 364) であった Wicks Cherrycoke に二人の物語を語らせる *Mason & Dixon* (MD) もまた宗教性を抜きに語ることはできない作品である。この点は、それ以前の作品についてと同様ピンチョン研究者により注目されており、『メイスン & ディクソン』における宗教はもっぱら科学や理性と対比され、多くの場合それらとの対立関係のもとに位置づけられてきた。たとえば「ラダイト的ヴィジョン」という観点から『メイスン & ディクソン』を論じる David Cowart は “Pynchon’s spiritual and metaphysical (even religious) seriousness, his disinclination to privilege . . . the scientific and technological message” (157) を指摘し、Victor Strandberg はチェリコーク牧師の語りを “a Christian counterpoint to the Age of Reason’s rationalist complacities [sic]” (107) と捉える。作品における “bodily resurrection” という “religious” (148, 166) なテーマの重要性を指摘する Justin M. Scott Coe は、復活信仰と 18 世紀の科学は相容れないゆえ、両者の板挟みになっているのが英国国教徒の科学者メイスンであるとする³。科学と近代の前提である身体と物質世界に対し、その「他者なる世界」としての宗教的現実の可能性を示唆しているのが『メイスン & ディクソン』におけるキリスト教であるとの指摘もある⁴。ただし、『メイスン & ディクソン』を論じる者が注目する宗教はキリスト教に限らない。Joseph Dewey は語り手であるチェリコーク牧師の存在がこの小説を “an explicitly religious novel” としているとするが、彼によれば作品を「明白に宗教的な小説」としているのはキリスト教 (“the damaged legacy of Christianity”) 以上に “the mysticism of the East” なのである (113)。

『メイスン & ディクソン』における宗教を科学や理性と対立させるこうした見方に首肯できる一面があることは確かである。ピンチョン自身がエッセイ “Is It O. K. to Be a Luddite?” (“IIOBL”) の中で、「理性の時代」そのもののうちに生じた “resistance to the Age of Reason” を指摘し、あたかも宗教が理性に対する反作用であるかのように、“folks in the 18th century” は “deep and religious yearnings for that earlier mythical time which had come to be known as the Age of Miracles” (“IIOBL” 40-41) を抱いていたと語っているのである (ただしカワートはピンチョンの “antirationalis[m]” は “mystic” のそれではなく、ゆえに “Pynchon is not, in the end, the perfect Luddite” [Cowart 158] と結論づけるが)。だが同時に、「理性の時代」を生きる二人の科学者——“Mason, pray You,— ’tis the Age of Reason [. . .] we’re

Men of Science” (MD 27)⁵——を主人公とする『メイスン&ディクスン』において、彼らが実践する科学に注目し、それがどのような性格のものであるかを精確に見てとるならば、宗教と科学を相互に排他的と捉える従来の見方には再考の余地があることもまた理解されるだろう。なぜならメイスンとディクスンが実践する科学の中心には「見る」という行為があり、そのことは、彼らの科学を宗教すなわち彼らが信仰するキリスト教と対立させるどころかむしろ一体、分離不能としていると考えられるからである。

メイスンとディクスンは何よりもまず「見る人」であるということが出来る。王室天文学者 James Bradley の助手メイスンは天体を観測する天文学者、メイスンの補佐役を務めるディクスンは“Staring yourself Blind” (MD 220) を仕事とする人、すなわち測量士である（加えてディクスンは、師 William Emerson 所有の“a fine *Telescope*”を使って“the Phases of Venus, [. . .] the Moons of Jupiter [. . .] the Mountains and Craters of our own Moon” [MD 17] を見た経験もある）。彼らの出会いは金星の太陽面通過の観測を通してであり、ゆえに彼らが「見る人」であるとは、作中頻繁に用いられる軽蔑的な響きのある語を用いるならば、彼らが“Star-Gazer” (MD 136) であることを意味する。メイスンとディクスンが the Royal Society により金星の太陽面通過の観測のため Cape Town へ派遣されたのは、二人が Vroom 家の三姉妹にレクチャーするように、またチェリコークが LeSpark 家の双子の男子 Pitt と Pliny に太陽系儀を使って説明するように、“the Solar Parallax” (MD 95) を求めるためである。太陽視差が求められるのは、それが分かれば地球から太陽までの距離が分かり、地球から太陽までの距離が分かれば“the size of the Solar system” (MD 721) が分かるからなのだが、やはりというべきか、異なる2点から太陽という恒星を見たときの視線の方向の差であるこの太陽視差という概念そのものの中に、すでに“Star-Gazing”が内包されているのである。

メイスンとディクスンの具体的な観測対象は“four Instants of perfect Tangency between Venus’s Disk, and the Sun’s” (MD 97) であるが、接触時の両天体の観測を彼らに可能たらしめているものは見るための道具である望遠鏡である。彼らが使用する“two-and-a-half-foot Gregorian Reflector” (MD 98) をはじめ、種々の望遠鏡はいわばその使用者が“Star-Gazer”であることの証しであるといえる（観測日、フローム家の三姉妹も知り合いの船乗りから“a nautickal Spy-Glass” [MD 99] を借りることでアマチュア“Star-Gazer”となる）。ただしこれは、“Star-Gazer”であるかどうかは望遠鏡に左右されるということでもある。事実、望遠鏡はその物質性により、“Star-Gazer”から「星を見る人」としての資格を奪いさえする。ブラッドリーの妻 Susannah が死んだ年である1757年、メイスンは7フィートの望遠鏡を用いて彗星を観測するが、“resolution” (MD 187) のせいで彗星がスザンナの顔に見える。メイスンは目が痛くなるまでスザンナの顔を見つめる(“I stare till my eyes ache” [MD 187]) が、こ

のときのメイスンはもはや天体を見ているとはいえない。“[H]igh-speed star-gazing” (MD 187) を行っているこのときの彼はむしろ “high-speed Susannah-Staring” を行っているといえるだろう。望遠鏡の物質性の介入により “Star-Gazer” が危機に陥る例はほかにもある。メイスンのライバルであり St. Helena でシリウスの観測に従事する Nevil Maskelyne は、“a defective Plumb-line suspension on his Sector” (MD 106) に悩まされる。天頂儀の下げ振り糸に問題があるためシリウスの位置の正確な測定が不可能となったマスカラインは “how can I trust anything I may see thro’ it, now?” (MD 132) と愚痴をこぼすが、これは「見る人」としての自らの危機を認識した天体観測者の嘆きにほかならない。ほかにも、Philadelphia で緯度を計測するために観測所を建設するもの大きすぎて中に入れられそうにない “that great Tube” (MD 297) や、あるいは視界の中の夜空を揺らめかせてしまう (“Vision in any way a-wobble” [MD 452]) 酔ったときの目という感覚器官そのものも、解像度の低いレンズや不具合を抱えた天頂儀同様、介入する道具であるといえる。こうした道具の不透明化という異化作用を通じて「見る」ことの文字どおり異なる様態がしばしば立ち現れ、「見る」という行為そのものが前景化されるが、このことから、本作が「見る」ことをめぐる小説であることが見てとれる。

実際の観測に際し、道具の物質性とは異なるものの、金星の高度が低いことによる “Quite a Tremor” やさらには “this damn’d Haze” (MD 98) により「見る」ことの物質性をやはり意識させられつつも、メイスンとディクソンは無事必要なデータを記録することに成功する。しかし、この観測で彼らが見るものは太陽面を通過する金星だけではない。金星を目撃するや否やディクソンは “Eeh! God in his Glory!” と口走り、また彼はのちにメイスンに “’Twas seeing [. . .] our Creator about his Work” (MD 98) とこのときの経験を語る。すなわち見るための道具である望遠鏡を太陽を横切る金星に向け、“The Arrival, perfectly as calculated, the three bodies sliding into a single Line” (MD 98) を自らの目で確認するとき、彼はそこに造化の神の働きをも見ているのである。もちろん神の姿そのものを見るということではなく、自然を神の働きの現れと見るということだが、このような意味での「神を見ること」が当てはまるのはディクソンに限らない。ケープタウン到着時、メイスンはオランダ東インド会社官吏に、自分たちは天文学者で、“Him that regulates the movements of the Heav’n’s” (MD 59) に仕えていると自己紹介する。またフローム家の三姉妹に事前にレクチャーをしながら、“Let us hope some of you are awake early enough, to see the Transit. Remember to keep both eyes open” と星を見る者となるための心得を教えつつ、太陽、金星、地球という三つの天体が一直線に並ぶのは “His artisanship” (MD 93) によるものだと説明する。メイスンにとって “the heavens” とは “the light-handed trickery of God so on display” (MD 164) にほかならないのである。こうした二人にとって、望遠鏡とは、ディクソンの師エマソンにとっ

てと同様、“steps of an unarguable approach to God” (*MD* 220) を構成する「一步」ということになる。物語の終盤、“‘moral reflections’ upon a ten-foot telescope, with a Micrometer” を記したメイスンのマスクライン宛の手紙（ただし現物は行方不明で正確な内容は確認できない）について、10秒に満たない太陽視差の角度により太陽系の大きさが分かり、2秒に満たないシリウスの年周視差から宇宙の大きさが分かるなら、角度1秒以下の領域においては“‘That Which we cannot,— may not,— see’ すなわち ‘G-d’” (*MD* 720-21) そのものを測定することが可能となるのではないかとの内容が含まれていた可能性が示唆されるが、ここにおいても望遠鏡という見るための道具はやはり神に接近するための手段なのである。

天空を司る神、あるいは神の働きとしての天体の運行という考え方は読むという行為ともつながる。先のオランダ東インド会社官吏への自己紹介の中でメイスンは、天文学者の仕事を天空の動きという神からの暗号メッセージを“solve, and read” (*MD* 59) することと説明する。ただしマスクラインによれば、天の半球上の星々の位置は数学的な点にすぎないとしてもその方程式は人間にとっては“unreadable” (*MD* 134) であり、神のみが球面の方程式のように解くことができるということになるのだが、いずれにせよ、神のみが計算可能であれ、マスクラインの見解においても天体の位置が天文学者にとって「読む」対象とされていることは、先のメイスンの説明と変わることはない。

この、神からの暗号メッセージである天空の動きを「読む」人間という天文学者像はピンチョンの創作ではない。金星の太陽面通過の観測日、現れた金星を目撃したディクソンは先に見たとおり神を讃える言葉を思わず口走るが、そのときに彼が思い浮かべるのは“Galileo” (*MD* 98) である。ガリレオは1623年出版の *The Assayer* の中で、彼の論敵を反駁して次のように説く。

Philosophy is written in this grand book, the universe, which stands continually open to our gaze. But the book cannot be understood unless one first learns to comprehend the language and read the letters in which it is composed. It is written in the language of mathematics, and its characters are triangles, circles, and other geometric figures without which it is humanly impossible to understand a single word of it. . . . (Drake 237-38)

ピンチョンの“gazer”たちは、ガリレオと同じく望遠鏡という解読のための光学装置を用いて、宇宙という「壮大な書物」に「数学の言語」で記された「語」あるいはテキスト（すなわち金星と太陽面の4つの接触状態）の意味をできるだけ精確に読み取ろうとしているのだということが出来る。そしてその壮大な書物には神が顕現している。次は1615年に書かれ

た *Letter to the Grand Duchess Christina* 中の一節である。“[T]he glory and greatness of Almighty God are marvelously discerned in all his works and divinely read in the open book of heaven” (Drake 196). デイクスは、宇宙という書物に書き込まれた金星の太陽面通過というテキストのうちに「全能の神の栄光と偉大さ」を読み取り、ガリレオの言葉がこだまするかのように「栄光に包まれた神よ」と思わず声を上げたのである。

『クリスティーナ大公妃宛の手紙』は、ガリレオが Copernicus の太陽中心説を擁護するカトリック教徒としての立場から聖書と科学のあるべき関係を説いた長文の論考である。“[T]he holy Bible and the phenomena of nature proceed alike from the divine Word” (Drake 182) と考えるガリレオにとって、聖書と科学が相容れないことはありえない。ガリレオのこの信念の中心にあるのは “accommodat[ion]” (Drake 181) という考え方である。「適応」とは、太陽が動き地球が静止しているという聖書の記述は、太陽の運動という見かけに反するがゆえに地動説を理解することも信じることもできない一般大衆の知的程度に「合わせ」たものであり、したがって自然についての真実は聖書ではなく “sense-experiences and necessary demonstrations” (Drake 182) に依らねばならず、そうして得られた自然についての真実の方が聖書の正しい解釈のために役立てられねばならないとする考え方である。この『クリスティーナ大公妃宛の手紙』で擁護されているコペルニクスもまたカトリック教徒であり (Warmia 司教である叔父の取り計らいにより同地の司教座聖堂参事会員となった)、ガリレオもそのことを論考中で強調し (“he was not only a Catholic, but . . . a canon. He was in fact so esteemed by the church” [Drake 178])、コペルニクス説が聖書と相容れないものではないことを力説するが、『クリスティーナ大公妃宛の手紙』のもととなった弟子 Benedetto Castelli 宛の手紙 (地動説に対するクリスティーナ大公妃の異議についてガリレオに伝えるカステリの手紙への返信) が引き金となった第 1 次裁判の結果 “suspended until corrected” (Finocchiaro 149) との処分を 1616 年に受けることとなったコペルニクスの *On the Revolutions* においても (ただし具体的な訂正箇所が示されるのは 4 年後のこと)、宇宙は当然神の製作になるものである。『天球回転論』の序文は教皇 Paul III へと宛てられているが、まずその序文中には “the world machine [is] created for our sake by the best and most systematic Artisan” (Copernicus 4) とある。次に、教皇宛序文と差し替えられる形となった本来の序文においても、『天球回転論』の主題である宇宙すなわち天球の回転は “divine” とされ、哲学者たちが天を “a visible god” と呼んできたことが言及された後、“things which he [a man] sees established in the finest order and directed by divine management” を観照することは “admiration for the Maker of everything” (Copernicus 7) へと人を駆り立てずにはおかないと述べられる。『天球回転論』本論においては、コペルニクスは従来の天動說的宇宙像に反して土星と恒星天球の間に広大な空間が存在することを結論として述べ

た第I巻第10章を“*So vast, without any question, is the divine handiwork of the most excellent Almighty*” (Copernicus 22) と締め括るが、1620年、同書において太陽を中心とする地球の動きを“*not as a hypothesis but as an assertion*” (Finocchiaro 200) として述べているとする箇所の修正を命じた禁書目録聖省はこの一文を削除対象としている (Finocchiaro 201)。

金星の太陽面通過がデイクスンに思い出させる科学者はガリレオだけではない。デイクスンの連想は“*Newton and Kepler*” (MD 98) にも及ぶ。ケプラーもまた宇宙に神を見た科学者である。“[T]he orthodox Lutheran Church of the country in which he had grown up” (Baumgardt 25) に仕えるべく Tübingen 大学で神学を学んだケプラー (天文学教授 Michael Maestlin の影響で傾倒することとなったコペルニクスについての自身の当時の研究は“*a sideline apart from theology*” [Kepler 63] だったと述懐している) が1596年出版の最初の著作 *Mysterium Cosmographicum* で目論むのは、巻頭の読者への挨拶で述べられているとおり、コペルニクスの地動説の立場から“*God’s motive and plan for creating it [the universe]*” (Kepler 49) を明らかにすることであった。ケプラーによれば、人間の建築家に喩えられる神 (“*God, like one of our own architects*” [Kepler 53]) の宇宙創造のための「プラン」の中核をなすのは5種類の正多面体である。『宇宙の神秘』は、これらの立体に基づいて宇宙が構築されているがゆえに、惑星の数、すなわち当時知られていた水星から土星までの6つと、惑星軌道の距離の比が現にあるとおりになっている (そして惑星は運動する) と論じる。

It is my intention, reader, to show in this little book that the most great and good Creator, in the creation of this moving universe, and the arrangement of the heavens, looked to those five regular solids . . . and that he fitted to the nature of those solids, the number of the heavens, their proportions, and the law of their motions. (Kepler 63)

地球の天球に正十二面体を外接させれば、この立体を取り囲む球が火星の天球となり、反対に地球の天球に正二十面体を内接させればその立体に内接する球が金星の天球となるというように、各惑星天球と5種類のみが存在する正多面体 (残りは正八面体、正四面体、立方体) をそれぞれ交互に配置する入れ子構造を宇宙の基本設計とするケプラーのアイデア——“*There you have the explanation of the number of the planets*” (Kepler 69)——は奇想以外の何ものでもない。だが『宇宙の神秘』出版直前の1595年10月3日、ケプラーは師メストリンに宛てて、“*I had the intention of becoming a theologian. . . [N]ow see how God is, by my endeavors, also glorified in astronomy*” (Baumgardt 31) と、神学者志望で

あった自身の努力により天文学が神の栄光を称えるものとなったと書簡をしたためている（この書簡中の “in God’s honor who wishes to be recognized from the book of nature” [Baumgardt 31] という一節からは、ケプラーにとっても神は「自然という書物」からその存在を認められるものであることが分かる）。『宇宙の神秘』に続く2つの著作、すなわち *Astronomia Nova* (1609) と *The Harmony of the World* (1619) においてケプラーは自身の名が冠されることになる3つの法則を提示することになるが（第1法則と第2法則は『新天文学』、第3法則は『宇宙の調和』において）、正多面体に立脚する自身の “physical, or rather metaphysical” (Kepler 63) な宇宙論がケプラーの法則提示後も彼にとって重要でありつづけたことは、『宇宙の調和』出版後の1621年に『宇宙の神秘』改訂版を公刊していることに窺い知ることができる。

『メイスン&ディクソン』第1部の終盤、ディクソンをアメリカでの緯度の測定に誘うために自宅を訪れたイエズス会士 Christopher Maire 神父に、ディクソンの師エマソンは “Newton’s Views upon Gravity and the Holy Ghost” (MD 227) についてなら喜んで話をしたいと応じる。ニュートンが宇宙と神をどのように見ていたかは、この「重力と精霊に係る見解」に見てとることができる。まず重力とは、いうまでもなくニュートンが1687年出版の名著 *Mathematical Principles of Natural Philosophy* の初版序文で述べているとおり、同書第1巻と第2巻で数学的に証明された諸命題を第3巻にて “the System of the World” に適用することで天体現象から導き出された自然の力のことであり、この力により物体は太陽ならびに各惑星へと向かい、惑星、彗星、月、そして海の運動もまたこの力から演繹的に導き出される (Motte xviii)。『プリンキピア』はその書名に明らかなように数学的アプローチによる自然哲学の書であるが、自然哲学についてニュートンは、1713年の『プリンキピア』再版とともに付された “General Scholium” で、 “to discourse of whom [God] from the appearances of things, does certainly belong to Natural Philosophy” (Motte 546) と述べる。この「総注」は、現象から推論されたのちに帰納により一般化された命題に基づく数理主義的自然哲学すなわち “experimental philosophy” (Motte 547) では不可能であったこの「神について語る」ことをニュートンが存分に行っている点で、彼の自然哲学の全体像が窺い知れるテキストの一つとなっている。その中で重力について、 “hitherto I have not been able to discover the cause of those properties of gravity from phenomena” (Motte 547) と、距離の二乗に反比例して弱くなるといった重力の性質の原因を帰納法に基づく実験哲学が発見できなかったことを認める。この直後に来る有名な一文 “I frame no hypotheses” (Motte 547) で言明されているとおり、 “[t]he hypothesis of vortices” (Motte 543) を唱えた Descartes とは対照的に、ニュートンは重力の原因を説明するために仮説に訴えることもしない。だが1704年に英語版初版が出版された *Opticks* のラテン語版初版（1706年刊）で追加された現 “Query 28” に

において、“whence is it that the Sun and Planets gravitate towards one another, without dense Matter between them?”を含む天体や動物の身体の“Order and Beauty” (Newton 369)をめぐる数々の疑問に対し、ニュートンは“*And these things being rightly dispatch'd, does it not appear from Phænomena that there is a Being incorporeal, living, intelligent, omnipresent*” (Newton 370)との答えを提示する。すなわち、太陽と惑星が間に密な物質もなしに互いに引き合う世界の秩序と美をニュートンは神に帰するのである。同じことが「総注」でも“*This most beautiful system of the sun, planets, and comets, could only proceed from the counsel and dominion of an intelligent and powerful Being*” (Motte 544)と述べられるが、この直前の部分でニュートンは、太陽、惑星、そして彗星の規則的な運動は「単なる力学的な原因」により生じたものと見なしてはならないことを強調する (“*it is not to be conceived that mere mechanical causes could give birth to so many regular motions*” [Motte 544])。そして『光学』の「疑問 28」でニュートンは、この力学的ではない「第一原因」を突き止めることが自然哲学の任務であるとし、次のように述べる。“*[T]he main Business of natural Philosophy is to argue from Phænomena without feigning Hypotheses, and to deduce Causes from Effects, till we come to the very first Cause, which certainly is not mechanical*” (Newton 369)。以上から、ニュートンにとって重力がどのようなものであったかが見えてくる。ニュートンにとって重力とは、力学的ではない原因である神が生み出した美しい秩序をもつ自然世界の構成要素であり、実験哲学ではその原因を明らかにすることができないものであったということが出来る。ニュートンにおいて、数学的分析の対象である重力は、力学では説明不可能な方法で世界を創造した「第一原因」である神もまた自然哲学の対象であらねばならないことを示しているのである。

重力についてのニュートンのこうした「見解」が公刊された著作において表明されているのに対し、精霊（より正確には三位一体）についてのそれは私的な文書のうちにとどめられている。“*An historical account of two notable corruptions of Scripture, in a Letter to a Friend*”と題された哲学者 John Locke 宛の 1690 年 11 月 14 日付の書簡で、ニュートンは新約聖書の 1 John 中、「神の子が来られた」 (“*the Son of God is come*” [Turnbull 108]) ことの証しである霊と水と血について述べた箇所である 5 章 7 節と 8 節を取り上げ、そこに本来はない “*the testimony of ye three in heaven*” (Turnbull 83) が三位一体を証明するために後から付け加えられたと主張する⁶。ニュートンはこの「改悪」の歴史を諸版の聖書の比較を通じて明らかにしてゆくが、その改悪の源泉の一つとしてニュートンが重要視するのが、ウルガタ (the Vulgate) と呼ばれる Saint Jerome によるラテン語訳聖書である。

Now this mystical application of the spirit water & blood to signify the Trinity,

seems to me to have given occasion to some body . . . fraudulently to insert the testimony of the three in heaven in expresse words into ye text for proving the Trinity. . . . And the first upon record yt inserted it is Jerome. . . . (Turnbull 87-88)

ニュートンは書簡の末尾で「ヨハネの手紙一」のテキストの一言一句に密着し、霊と水と血を三位一体を表すものとせずともそれだけで神の子であるキリストの訪れの証しとなつてゐるとの精読的読解を披露するが (Turnbull 107-08)、三位一体を退けるニュートンのこの解釈は彼が Arius 主義者であったことと関係する。ニュートンはこの手紙が書かれた 1690 年の 15 年前にはすでにアリウス主義者となつてゐたが (Westfall 315, 332)、異端とされたこのアリウス主義は神の子キリストを父なる神と同質としない (“Arius and his followers . . . denied the Trinity and the status of Christ in the Godhead” [Westfall 312])。以上をニュートンの精霊についての見解としてよいならば、ここからは、原因が不可知である重力が存在する世界、すなわち金星の太陽面通過等の天文現象が生じる世界を力学的ではない方法で創造した「第一原因」であるニュートンの神とは、三位一体を否定する神であつたことが分かる。

以上見てきたことから、天空に目を向け、そこに神を見いだすピンチョンの二人の科学者は、自然の真理の探究をそのまま神をめぐる宗教的考察でありキリスト教信仰の一形態としたガリレオ、ケプラー、そしてニュートンの直系の後継者であるといふことができる。英国国教会、フレンド会および理神論、カトリック、ルター派、そしてアリウス派という宗派の違いおよび正統と異端の別も問題とはならない。彼らのキリスト教信仰は一見このように相異なり、その多様性は確かに神についての見解の相違となつて現れはする。たとえばメイソンは、Mohawk 族の族長 Hendricks に神の居所を尋ねられたとき上 (“Up”) を指差すが、それを見たディクソンは理神論の洗礼を受けた者らしく、天頂だけではなく “a little more . . . all-encompassing?” (MD 651) と疑義を呈する。またディクソンは “Newton is my Deity” (MD 116) と公言するほどのニュートン信奉者だが、同時に彼の理神論はニュートンの自然哲学とは相容れない。神の働きを世界の創造に限定する理神論は、太陽系のわずかな不規則性は神によって「改善」される——“some inconsiderable Irregularities . . . which may have risen from the mutual Actions of Comets and Planets upon one another, and which will be apt to increase, till this System wants a Reformation” (Newton 402)——というニュートンの神の介入論の否定にほかならないからである。だがこれらの相違点が相違点として現れうるのは、彼らの一見多様なキリスト教信仰がみな自然の創り主としての神を疑問の余地のない前提として共有しているから、すなわち彼らがみな自然の背後に神を見ているからである。このことを別の言い方で表すなら、彼らはみな Pierre Simon de Laplace 以前なのである。

ニュートンにとって、“[the World] might arise out of a Chaos by the mere Laws of Nature”と考えることは“unphilosophical” (Newton 402) 以外の何ものでもなかったが、フランスのニュートンと称されるラプラスは1802年8月8日、彼との天文学談義中に意見の相違が昂じて“*And who is the author of all this!*”と声を上げた第一統領 Napoleon に対し、“*a chain of natural causes would account for the construction and preservation of the wonderful system*” (Lubbock 310) と答えたとされる⁷。太陽系の生成を神に帰するのではなく自然法則のみにより説明しようとし、太陽系の力学的安定を証明することでニュートンの「介入する神」を無用のものとしたこのラプラスの登場まで、もう少し待たねばならないのである⁸。

天文学と神に関する限り、『メイスン&ディクソン』において科学と宗教は対立するどころか分離不能、一体であるといえる⁹。だが同時に、この小説において、科学者は神以外を通して宗教と関わりをもつのであり、その場合、先に触れたとおり、本作における科学と宗教は相容れないものと解釈されてきた。その際の焦点の一つが死者の復活である。1765年2月24日の日曜日、New Jerseyで馬から振り落とされ腰を負傷したメイスンは、療養中に1 Corinthiansの15章を読む。新約聖書のこの箇所では使徒 Paul は蒔かれて死んだ種から人間と獣の“Bodies”さらには“Bodies Celestial and Terrestrial, and the Glories proper to Each”が生まれると述べた後“*So also is the Resurrection of the Dead*” (MD 409) と死者の復活をアナロジーを用いて説くが、メイスンにはそのアナロジーが理解できない。“*Excuse me? [. . .] ‘So also?’ I don’t see the Connection. I never did*” (MD 409). ここでメイスンが死者の復活の解釈に「躓」く——“*Mason, in attempting to prove what Paul stipulates at the outset, that ‘the dead rise,’ stumbles on Paul’s seemingly simple analogy . . .*”——ことから、“*Mason’s Enlightenment rationality*” (Scott Coe 151) と宗教は相容れないものとされるのである。しかしここで確認されなければならないのは、死者の復活が、科学者の中に居場所を見出すことが原理的に不可能なものであるわけではないということである。そのことを教えてくれるのはやはりニュートンである。先に見たロック宛書簡でニュートンは、「ヨハネの手紙一」における霊と水と血が三位一体を表すものではないことを、聖書本文の引用に自身による補足的説明を適宜挿入しながら、血に関してはそれをキリストの十字架上の死とその後の復活と結びつけることで論証しているのである。以下のニュートンの書簡からの引用中、イタリック体の部分はニュートンが引用する聖書の“*the text it self*” (Turnbull 107)、それ以外の部分はニュートンによる補足である。

This is he that after ye Jews had long expected him, came first in a mortal body by baptism of water and then in an immortal one by shedding his blood upon the crosse & rising again from the dead. . . . For there are three that bear record of his

coming, *the spirit* wch he promised to send, & wch was since shed forth upon us in the form of cloven tongues & in various gifts, *the baptism of water* wherein God testified this is my beloved son, *and the shedding of his blood* accompanied wth his resurrection whereby he became the most faithful martyr or witsnesse of this truth. *And these three*, the spirit, the baptism & ye passion of Christ *agree in* witnessing *one* & the same thing (namely that the Son of God is come,) & therefore their evidence is strong. (Turnbull 107-08)

ニュートンにとって、これが「改悪」以前の「正しく無理のない意味」(“the sense is good & easy” [Turnbull 107]) なのであり、ここでのニュートンに、死者の復活が科学者と共存可能であることの実例を見ることができる。

これに対し、メイスンの場合は死者の復活というキリスト教信仰の中核をなす教義に「躓」く。彼は死者の復活を科学的に説明しようとするのだが、そのとき、科学そのものが「躓」きの原因となる。メイスンにとって死者の復活が切実な問題であるのは、彼自身が身近な人間の死からの復活を経験したから、すなわち亡き妻 Rebekah が彼のもとを訪れるようになったからである。レベッカの“visible Phantom” (MD 171) があるときからメイスンに語りかけ始める (“Rebekah [. . .] has begun to speak to him” [MD 164])。レベッカの出没など “the Age of Reason” (MD 164) にはあり得ないこととしてメイスンをはじめそれを否定しようとするが、同時に彼女の復活を合理的に説明せずにはいられない。“But if Reason be also Permission at last to believe in the evidence of our Earthly Senses, then how can he not concede to her some Resurrection?” (MD 164). もちろん、「現世的感覚」を持ち出して合理的説明を試みるメイスンはここで、ガリレオが挙げた自然の真理に到達するために必要な二つのもののうちのもう一方、すなわち「必然的な証明」を忘れていたのであり、メイスン一人にレベッカが見え、彼女の声が聞こえたところで、亡き妻の復活が客観的に証明されたことにはならない。証明なしに死者の復活を感覚的経験のみから「合理的」に説明できたと思ひ込むことは、その説明が説明になっていないがゆえに理性の敗北にほかならず、ここでは確かに科学者メイスンと信仰は相容れないものとなっているといえよう。目に見え、声が聞こえるという点でレベッカの復活を身体性を有したものと捉え、彼女を死後の生を生きている存在と見なしてよいならば、メイスンにおけるこの科学と宗教の相容れなさは、「深い宗教的なあこがれ」の対象である「奇跡の時代」に属する “afterlife” と “bodily resurrection” (“IIOBL” 41) を理性の時代への抵抗の契機に数えたピンチョンのラダイト論とも整合している。加えて、死後の世界からの亡き妻の訪れは、対抗コミュニケーションネットワークが存在する証しであるかもしれないポストホルンのマークと同様、“intrusion into this world

from another, a kiss of cosmic pool balls” (CL49 124) としての奇跡の一例でもある。

だが同時に、ピンチョンはラダイト論において、「奇跡の時代」から続く“the abiding human hunger”は、「死後の生」と「肉体の復活」の“evidence”だけではなく“God” (“IIOBL” 41) の「証拠」をも求めるものであるとする。だとすれば、天体の運行に神の御業を見いだす『メイスン&ディクスン』の星の観測者たちは、ラダイトたる資格を有していることになる。完全に計算どおりに一直線に並ぶ3つの天体は神（とニュートンら科学者の偉業）の「証拠」にほかならないのである。これはまた、「この世界への別の世界の侵入」という意味での奇跡を科学を通じて目撃し経験することでもある。ここからは、ピンチョンにおける宗教と科学を対立であれ親和性であれ一面的な関係からのみ捉えようとするものの不適切さが明らかとなる。科学によって立つ理性と奇跡を求める信仰は、死者の復活に「躓」くメイスンにとってそうであるように折り合いがつかない（ゆえにレベッカの復活に、作者のラダイト論に沿う格好で「理性の時代への抵抗」を読み取ることが可能となる）こともあれば、「星を見る人」としてのメイスンとディクスンの場合のように両立することもあるのである¹⁰。ピンチョンにおいて、宗教と科学の関係は両義的なものであり、“Serious scholarship in the history of science has revealed so extraordinarily rich and complex a relationship between science and religion in the past that general theses are difficult to sustain. The real lesson turns out to be the complexity” (Brooke 6) と科学史家が指摘するおりのことがピンチョンのテキストについてもいえるのである。このことと関係するのが、ピンチョンの理神論に見られる両義性である。“As religion was being more and more secularized into Deism and nonbelief” (“IIOBL” 41) と、ラダイト論においては「理性の時代」を象徴する現象の一つとされている理神論だが、『メイスン&ディクスン』では先に見たとおり、ディクスンのように理神論を通じて自然全体に遍在する神を「見る」ことができるのである。この理神論の両義性（ピンチョンの理神論の両義性であると同時に理神論そのものの両義性）を踏まえてこそ、“20th-century Luddites looked back yearningly to another age—curiously, the same Age of Reason which had forced the first Luddites into nostalgia for the Age of Miracles” (“IIOBL” 41) という20世紀のラダイトについてのピンチョンの逆説的な指摘の意味の一端が理解できるのである。

作中、科学を通じて確認される神と、科学者を「躓」かせる死者の復活が、ともに作者にとって奇跡の具体例でありながらも、科学との関係において対照的な位置づけにあるとするならば、本作における重要な対照はそればかりではない。『メイスン&ディクスン』において、宗教と調和する科学は「見る」という行為と不可分であるが、天空に神を見ることは地上のものが見えないこととコントラストをなしている。Bencoolenがフランスの手に落ちたと分かっているながら同地を目的地とするメイスンとディクスンの乗った船 *Seahorse* 号は、イギ

リス海峡を航行中にフランス船 *l'Grand* 号からの攻撃に遭う。この出来事をめぐって浮かぶ数々の“Questions”について王立協会に問い合わせの手紙を書くものの、その答えを見出すことはできないだろうということをメイスンとディクソンは理解している (“Questions whose Awkwardness has only increas'd as the Astronomers have come to understand there may be no way of ever finding the Answers” [MD 44])。アメリカの地でも、真っ直ぐな境界線を引きながら “We shouldn't be runnin' this Line . . . ? [. . .] [S]omething invisible's going on [. . .]” (MD 478) と自らの任務に疑問を感じつつも、裏で進行中のその「見えない何か」がアメリカの政治なのかイエズス会なのか、それとも東インド会社なのか二人には分からない。辛うじて分かるのは、彼らが送られたすべての地、すなわちケープタウン、セントヘレナ島、そしてアメリカに共通して見られる奴隷制という “public Secret” (MD 692) に自分たちも巻き込まれているということのみである（ただしこの場合も、当初奴隷の姿は視界には入っていても目には見えていない。 “[T]ho' Slaves pass'd before his [Dixon's] Sight, he saw none” [MD 398])。この地上における見え難さからパラノイアが生じるが、このパラノイアをピンチョン研究者は “the view from below” (Hume, “Mason” 66) との言葉で説明する。「下から」であるのは、パラノイアに陥る “Men of Science” は “but the simple Tools of others, with no more idea of what they are about, than a Hammer knows of a House” (MD 669) だからである。同じ「下からの眺め」でありながら、現世において自分たちを巻き込み動かしている「何か」を見ることはできず、天空の支配者は見ることができる。このような科学者をピンチョンは『メイスン&ディクソン』で描いているということが出来る。『重力の虹』に登場するロケットエンジニア Franz Pöklerに通じるアイロニカルな科学者像といえるかもしれない。しかしながら、「下からの眺め」が地上世界でのパラノイアだけではなく、科学を通じ、現世を超えたところで可能となる信仰へと至るものでもあることは、『メイスン&ディクソン』から読み取る必要があるのである。

メイスンとディクソンがフランツ・ペクラーに通じる科学者であるとはどういうことか。最後に、この点について付言しておかなければならない。ペクラーもまた「星を見る人」であるということが出来る。実際に望遠鏡を覗いて観測するわけではないが、ロケットエンジニアである彼の目は月へと向けられている (“dreaming of expeditions to Venus” [GR 401] とあるように、その目はメイスンとディクソンと同じく金星にも向けられている)。ロケットで月へと到達することが彼の “dreams” (GR 401) の中心を占めている。ロケット研究に現を抜かす彼を蔑む妻 Leni (彼女の意識の流れを構成する “Let him look for flight out at the Rakettenflugplatz [. . .]. Let him fly to the dead moon if he wants to . . .” という言葉からは、彼女の心が、月へと飛翔し “gravity” [GR 162-63] から逃れることしか目に入らない夫から離れてしまっていることがはっきりと見てとれる) と映画 *Die Frau im Mond* (GR 159) を

観ながら技術的な点について粗探しをしては優越感に浸り、Peenemünde ではロケットを見学後いつかロケットに乗って飛んでいかと尋ねる娘 Ilse に対して“Perhaps someday to the Moon” (GR 410) と答える（『メイスン&ディクソン』とのつながりを強化するかのようには、月面地図を見ながらイルゼが住みたい場所として選ぶクレーターは“Maskelyne B” [GR 410] である）¹¹。

だがレニにとっては、ロケットによる月への到達を夢見る“her Piscean husband” (GR 154) がしていることは“swimming his seas of fantasy” (GR 154) であり、それはドイツの思春期の少年が空を見ながら自慰行為に耽ること (“watching the sky, masturbating” [GR 162]) と何ら変わるところはない。このペクラーの姿はメイスンと重なる。のちに妻となるレベッカに初めて話しかけられたとき、メイスンは“Star-Gazing”に“masturbating” (MD 171) の意味があることを意識せずにはいられないのである。そして“to leave the earth. To transcend” (GR 400) という自身の夢に駆られたこのロケットエンジニアには、メイスン同様地上のことが見えない。“Oh you're blind” (GR 400) と、“the Society for Space Navigation” (GR 162) での彼らのロケット研究が“to kill people” (GR 400) という目的のために軍に利用されていることが分からない夫に、レニは吐き捨てるようにいうのである。彼にはある年、Major Weissmann が娘イルゼをペーネミュンデまで突然連れてきたことが何を意味するのかも分からない (“Weissmann? What was this?” [GR 408])。以降、毎年訪問してくる自分の娘が“the same one” (GR 417) であるかどうかについてすら確信がもてない。1943年、ペクラーは毎年の恒例となったバルト海沿岸の Zwölfkinder (“a children's resort, almost a spa” [GR 419]) でイルゼと過ごす休暇のおかげでイギリスによるペーネミュンデ空襲を免れる。8月に休暇を過ごすようヴァイスマンが1939年に仕向けたのは4年後のこの空襲から自分を救うためだったという“a terrible suspicion”がペクラーを捉えるが、彼は自分でもその考えが“a bit paranoid” (GR 423) であることを承知している。次の赴任地である Nordhausen でヴァイスマンからある1機のロケットに搭載する新たな装置のためにプラスチック製の覆いを開発する任務を命じられたとき、ペクラーはこのためにヴァイスマンは自分を助けたのだと確信するものの、機密であるために誰も目にしたことの無い装置に関わるこの任務自体がどのような意味をもつのか彼には分からない (“It made no sense to him” [GR 431])。“How long had Weissmann been keeping him deliberately on ice, all so he'd have a plastics man he could depend on, when the time came?” (GR 432). 迫り来るアメリカ兵から逃れるためノルトハウゼンを後にする段になっても、ペクラーはこのように、“his master”であり“the sadist” (GR 424) であるヴァイスマンにいつから目をかけられていたのかと自らに問うことしかできないのである。

このように、『メイスン&ディクソン』の科学者同様、『重力の虹』のロケットエンジニア

もまたスターゲイザーであり、「単なる他者の道具」なのである（「他者の道具」であることを自覚しているかのように、レニに捨てられたペクラーは自身を“an unemployed servant who'd go with the first master that called” [GR 414] と考える）。だがこの類似は、二つの小説の違いを浮き彫りにもする。「下からの眺め」に関して、自身を巻き込み利用する広い意味での政治的な「何か」が「見えない」という世俗の不可視性はペクラーおよびメイスンとディクソンに共通する。しかしながら、金星の太陽面通過という自然現象に神の働きを「見る」ことができるという、信仰から生じる可視性は、『重力の虹』のロケットエンジニアには当てはまらない。ペクラーが月（および金星）に見るのは投影された自身の夢であり、ディクソンがそこに神の御業を見たと言った金星の太陽面通過をそもそも可能たらしめている重力は、ペクラーにとっては先に見たとおり飛翔を邪魔するものであり、ゆえに侵攻の対象（“They were invading Gravity itself” [GR 404]）なのである。金星の太陽面通過を経験したディクソンはニュートンに思いを馳せ、そのニュートンにとって、重力が存在する自然の世界の秩序と美は神に帰せられたのに対し、ペクラーにとっては月も重力も神とは無縁なのである（重力が演じる役割の重要性という意味において、『重力の虹』と『メイスン&ディクソン』は重力をめぐる二部作であるということができるだろう）。ヴァイスマンから1機のロケットを改造する命を受けたとき、ペクラーは開発を担当する覆いの素材に Imipolex G という断熱性プラスチックを用いる。その開発者である化学者 Laszlo Jamf は、Kekulé がベンゼンの環状構造を発見するきっかけとなった自らの尾を咥えた蛇の夢について講義する中で、“Nature” の中に存在する “molecules” をそのまま利用することは、“*They can be changed*” (GR 413) であるがゆえに恥ずべきことと説く。ペクラーはこのヤンプの教え子であり（彼はヤンプの “polymer theory” [GR 161] の授業の受講生であった）、人間により自由に改変と侵攻が可能な彼ら師弟にとっての自然は、信仰を通じて神というラダイトの奇跡を「見る」ことを可能にしてくれる自然とは似て非なるものなのである。

「他者の道具」である科学者が天体に目を向けながら、そこに神を見るか見ないかという違いが、『メイスン&ディクソン』と『重力の虹』の間には生じている。「神を見る」という視座から『メイスン&ディクソン』を読むことは、同作における科学と宗教の一体性を明らかにしてくれるばかりでなく、こうして『重力の虹』との共通点と相違点をも浮き彫りにしてくれるのである。そのうち相違点については、アダムズの^{ヴァージン}聖母マリアと『V.』の女性主人公 V と同じく、^{ポジ}陽画としての宗教とその^{ネガ}陰画という反転の関係としてそれを考えることができるだろう。すなわち、『メイスン&ディクソン』における信仰を通じて科学者に神を見せてくれる自然と、その^{ネガ}陰画としての、『重力の虹』における「他者の道具」として神の顕現たりえない自然（であるがゆえに、月への到達という個人の夢を乗せ重力に「侵攻」するロケットが開発される）である。宗教とその消失という、科学を軸として眺めたときに現

れる両作の間でのこの反転した関係はほかにも見てとることができる。たとえば科学者メイソンを「躓」かせた死者の復活という奇跡だが、メイソンは亡き妻の復活を科学的に説明することには「躓」いたものの彼女の復活そのものは否定しておらず（「どうして彼女に何らかの復活を認めずにいられよう」）、この点で彼はキリストの復活を所与としたニュートンと同類であるということが出来る（ただしメイソンは聖書の理解には「躓」く）。だが『重力の虹』においては、死者の復活は霊媒を通じて声として復活した死者その人によりその概念自体が否定されていたのである（降霊は「宇宙論的ビリヤード玉」論における「この世界への別の世界の侵入」としての奇跡でもある）。第一次世界大戦後のドイツで復興相と外相を務めた故 Walter Rathenau は、“Earth’s excrement”であり“the preterite dung”であるコールタールから合成された“the first new color on Earth”である藤色の染料“mauve”の重要性を説きながら、この化学的合成は“resurrection”ではなく“the impersonation of life”（GR 166）であると、降霊会に集った IG Farben 社のエリート国家社会主義者たちに語る。“The real movement is not from death to any rebirth. It is from death to death-transfigured”（GR 166）。化学は「死後の生」と「肉体の復活」という宗教的奇跡を合成という「生の偽装」と「形を変えた死」へと戯画的に転化させようことを、『重力の虹』はすでに教えていたのである。もう一つ、占星術を信じるレニ・ペクラーは “[t]he new planet Pluto” を “the grim phoenix which creates its own holocaust”（GR 415）と呼び、科学が新たに発見した惑星である冥王星が自ら爆発したのち「神の介入なし」に復活を演じると説明する（“deliberate resurrection. Staged. Under control. No grace, no interventions by God” [GR 415]）が、レニはこの不死鳥としての冥王星の死からの復活劇を“National Socialism”（GR 415）に関わる“[s]igns and symptoms”（GR 159）であると解釈する。すなわちここでの惑星“Pluto”の復活は、“Jewish ‘plutocrats’ like Walter Rathenau”（Weisenburger 240）に代わって“Hitler”（GR 415）が台頭することを意味しているのであり、この復活もまた再生ではなく、ホロコーストという死と結びついていたのである。

レニは天体の動きと地上の出来事が “[p]arallel” な関係にあると、“the cause-and-effect man”（GR 159）であり占星術を否定する夫フランツに反論するが、このレニの占星術もまた、宗教と直接関係するものではないものの、『メイソン&ディクソン』との反転を孕んだつながりを指摘できるかもしれない。メイソンは“Maskelyne’s natal Chart”（MD 144）と“his [Dixon’s] Horoscope”（MD 765）を読み、ディクソンもメイソンの出生天宮図を読んでいたかもしれない（“He [Dixon] may’ve done my [Mason’s] Horo on the sly, for all I know” [MD 765]）。メイソンがマスクラインを占うのは、シリウスの観測までの時間潰しにお互いの“natal Chart”（MD 137）を読み合うことをマスクラインが提案したためだが、そのマスクラインは妹 Peggy の結婚に関して“her Horoscope”（MD 136）を使って占ったことがあるのみならず

(このため “Nevil the Astrologer” [MD 136] という軽蔑的なあだ名をつけられる)、折に触れて出生天宮図を解説しては “sixpence” (MD 136) を稼いでいた (“You got *sixpence*? I never did better than three [. . .]” [MD 136] と、「占星術師ネヴィル」の稼ぎぶりにメイスンは驚く)。『メイスン&ディクスン』の天文学者たちはこのように占星術にも通じているのだが、この天文学者像もまたピンチョンの創作ではない。“Kepler said that Astrology is Astronomy’s wanton little sister, who goes out and sells herself that Astronomy may keep her Virtue” (MD 136). マスクラインにこのように言及されるケプラーもまた占星術に通じた天文学者であった。占星術に対するケプラーの感情は両面的 (“mixed” [Gingerich 290]) であったといえる。ケプラーはしばしば占星術を否定的な意味合いを込めて “the foolish little daughter of respectable astronomy” (Gingerich 290) と呼んだが、同時に実生活の面でケプラーは「馬鹿な娘」から少なからぬ恩恵を受けてもいた¹²。加えて、占星術の世界観はケプラー自身の宇宙観と響き合うものでもあった。“[H]is profound feeling for the harmony of the universe included a belief in a powerful concord between the cosmos and the individual. These views found their fullest development in the *Harmonice mundi* [*The Harmony of the World*]” (Gingerich 290). ケプラーにおけるこの天文学と占星術の共存は、占星術に対するアンビヴァレントな感情も含め、『メイスン&ディクスン』の天文観測者たちにそのまま引き継がれているということができる。科学者である彼らは皆、占星術を少なくとも締め出してはいない。対して、ロケットによる月への到達を夢見るペクラーには占星術の入り込む余地はなく (“There is no way for changes out there to produce changes here” [GR 159] というのが「因果関係の男」である彼の言い分である)、『メイスン&ディクスン』の天文観測者たちにおいてはある程度の一体性を見せている科学と占星術は、『重力の虹』においては夫フランツと妻レニに完全に分離していたのである（さらにその妻は夫のもとを去る）。このように占星術に関しても、科学との共存と両立の可能性と不可能性という反転した関係が、両作の間には認められるのである。

『メイスン&ディクスン』と『重力の虹』は基本的に同じテーマを扱っている、すなわちどちらも端的に近代の科学技術がもたらす破壊を主題としているということ是可以する。そしてその場合、その主題の一貫性は、破壊を生み出す科学技術の象徴として両作がともに直線を用いていることでより明瞭となる。望遠鏡を用いた天体観測により緯度を測定しながら、引くべきではないのではないかとの疑念を抱きつつメイスンとディクスンが “due west” (MD 8) に向けて引く Pennsylvania と Maryland を分ける真っ直ぐな境界線は、自然の地形に沿うという境界線の本来のあり方 (“Boundaries follow Nature” [MD 542]) に反しているために、風水を知る中国人にいわせるなら “a Conduit for [. . .] Bad Energy” (MD 542) となる (“To mark a right Line upon the Earth” は、風景にその形を与える内なる “the Dragon” の

体表を傷付けることにほかならない [MD 542])。Tyrone Slothrop は、The Hague から London へ向けて発射される V-2 ロケットを誘導するための無線がイギリスを本拠地の一つとする多国籍企業 Royal Dutch Shell 社のハーグにある “headquarters building” (GR 241) から送信されていることに驚くが、その建物はハーグのロケット発射地点とロンドンとを「直接結ぶ線上」 (“in a direct line from their firing sites to London” [GR 241]) に位置している。ハーグとロンドンを直接結ぶ線とは西すなわち 260 度 (“Fired west, at London, about 260°” [GR 707]) の方向へと伸びる直線であり、これは西へと伸びる直線という点ではメイスンとディクソンの “the West Line” (MD 296) とぴったり重なる (V-2 ロケット風にいえば、メイスンとディクソンの「西の線」の進行方向は 270 度ということになるだろう)¹³。このように直線は、両作に通底し、両作を文字どおり直結するモチーフとなっている。だが直線が象徴する破壊的な近代科学技術という主題の一貫性は、『メイスン&ディクソン』と『重力の虹』の間に存在する重要な相違を覆い隠すものであってはならない。『メイスン&ディクソン』の役割の一つは、科学が宗教と一体となることが可能であること、そして両者が一体となるとはどういうことであるかを「理性の時代」を舞台とする歴史小説の形で示すことで、『重力の虹』における科学を信仰と不可分な科学に対する陰^{ネガ}画として相対化し、浮かび上がらせることだからである。

* 本稿は、日本英文学会関西支部第 16 回大会 (2021 年 12 月 18 日、オンライン開催) ならびに日本アメリカ文学会関西支部例会 (2022 年 9 月 24 日、於千里金蘭大学) において発表した拙稿 (「神を見る “Star-Gazer”——*Mason & Dixon* における科学と宗教」「*Mason & Dixon* における科学と宗教——*Gravity’s Rainbow* との比較をまじえて」) に基づいている。本研究は JSPS 科研費 JP20K00415 の助成を受けたものである。

註

1. *Gravity’s Rainbow* からの引用中、引用者による省略は、本文中の省略と区別するため角括弧で示す。
2. (広義をも含む) 宗教性に注目したピンチオン研究は McClure (*Partial Faiths* 26-27) および Dewey (130n2) に整理されている。
3. “[T]he Christian belief in Jesus rising from the dead . . . became an increasingly difficult proposition to put together with new scientific discoveries” (Scott Coe 149).
4. “To rely only on the body and the material world is the premise of science and of modernity. . . . *Mason & Dixon* . . . features the versions of Christianity most prominent at the time. By pushing us to consider other worlds, Pynchon also suggests that a religious reality may be possible” (Hume, “*Mason*” 67). ただし Kathryn Hume は、『メイスン&ディクソン』においてキリスト教は

Against the Day におけるほどには強調されていないとする (“*Mason*” 68)。ヒュームはつねに近代世界を “re-sacralize and re-enchant” (Hume, “Religious and Political Vision” 182) しようとしてきたピンチョンが『逆光』においてカトリックへの転回を見せていると指摘する。だがその宗教的転回はやはり科学と対立するものと捉えられている。“Since history aligns Protestantism with the rationalising processes of modernity and science, Pynchon’s turn to a Catholic perspective makes sense as a step in restoring the magic destroyed by the Enlightenment project” (Hume, “Religious and Political Vision” 182). 『競売ナンバー 49 の叫び』と『重力の虹』の神秘主義がヨーロッパ的カトリシズムと関係をもつことについては Hungerford (27) を参照。

5. *Mason & Dixon* からの引用においても、本文中の省略と区別するため引用者による省略は角括弧で示す。
6. H. W. Turnbull 編 *The Correspondence of Isaac Newton* 第3巻の注に聖書諸版のテキストが示されており、参考になる。注には “[t]he Vulgate text” (Turnbull 124) が引かれているが、「天の三者による証し」に関する箇所は宣教師 Émile Raguét による日本語訳は次のとおり。「天において証するもの三つあり、父とみ言葉と精霊とこれなり」(ラゲ 677)。ラゲによるウルガタ聖書に基づいた日本語訳には欄外に豊富な注が付されているが、引用箇所には、ラテン訳にはあるが「ギリシア文には見えない」(ラゲ 679) との重要な注がある。1611年出版の the Authorized Version もニュートン書簡集の注に引用されているが、欽定訳聖書においても霊と水と血に加え、次のとおり “the Father, the Word, and the Holy Ghost” が天において証しするとある。“7. For there are three that bear record in heaven, the Father, the Word, and the Holy Ghost: and these three are one. 8. And there are three that bear witness in earth, the spirit, and the water, and the blood: and these three agree in one” (Turnbull 124).
7. このやりとりを日記に記録した William Herschel の名前は『メイスン&ディクソン』作中に登場する。彼は王室天文学者マスケラインにその “great Accomplishment” (MD 769) を祝福される天王星の “official Discoverer” (MD 708) であり、“frightfully damn’d talented Organist” (MD 214) でもある。
8. ディクソンは自身の天文学の経験に関して、“I’ve been *taught* the lot, Celestial Mechanics, all the weighty lads, Laplace and Kepler, Aristarchus [. . .]” (MD 17) とラプラスについても教わったとメイスンに語るが、1749年生まれのラプラスが *Traité de mécanique céleste* を出版したのは1799年から1825年にかけてであり、作中のこのラプラスの「登場」は意図的なアナクロニズムであると考えられる。ここでディクソンは天文学の一分野としての “Celestial Mechanics” を教わったと述べていると思われるが、“Celestial Mechanics” はラプラスの『天体力学』の英語訳書名でもある。“Celestial Mechanics” がラプラスの同書を指しているのだとすれば、アナクロニズムはより鮮明になる。

9. このことは作中の別の天文学者（兼“Astrologer” [MD 136]）を見ても分かる。“As a man of Religion, he [Maskelyne] has often enough sought among the smaller Probabilities for proofs of God’s recent Attendance, has practis’d Epsilonics for the sake of stronger Faith, as what deep-dyed Newtonian would not?” (MD 138). ニュートン主義者であると同時に副牧師 (“I’ve a Curacy” [MD 132]) でもあるマスクラインは、極小の確率の中に神の訪れの証しを求めるのである。天文学（および占星術）とは関係ないものの、チェリコークも牧師と “the Mathematics, particularly the science of the fluxions” が “congenial” (MD 721) であることを認める。
10. 適応主義の立場をとるガリレオにとっても、理性は「神からの賜物」 (“reason, divine gift of Providence” [Drake 209]) であるがゆえに信仰と両立する。
11. マスクラインに加え、本論と関係があるところではケプラーとコペルニクスもクレーター名として登場している (“Passing over the bright rays of Kepler, [. . .] the spectacular views at Copernicus [. . .]” [GR 410])。
12. “[H]is astrological opinions continually provided welcome supplementary income and later became a significant justification for his office as imperial mathematician” (Gingerich 290). Tycho Brahe の助手を務めていたケプラーはブラーエの死後、師の後を継いで神聖ローマ帝国皇帝 Rudolf II の皇帝付数学顧問官となった。ルドルフ 2 世に行ったものを含め、ケプラーの占星術の実例は *Culture and Cosmos* 第 14 巻第 1-2 号 (“Kepler’s Astrology” 特集号) を参照。
13. ハーグからロンドンへのロケットの発射方向が 260 度であることについては、ピンチオンが参考にしたと思われる Kooy and Uytenbogaart に “the firing direction to London, viz. 260°” とある (285)。Weisenburger (358) も参照。

メイスンとディクソンが引く直線は「西の線」だけではない。フィラデルフィア最南端の地点から約 31 マイル西の “John Harland’s farm” (MD 330) へ、さらにはハーランドの農地から 15 マイル南の “Alexander Bryant’s farm” (MD 333) まで、彼らは直線的に移動する。「西の線」に取りかかる前には、Delaware 半島中央の “the Middle Point” からほぼ真北へ伸びる直線、すなわち “the Spire of the Court House in New Castle” を中心とする半径 12 マイルの円弧との “Tangent Line” (MD 335) を確定する。さらにはそうして決定された “the Tangent Point” から真北へ、 “North Line” (MD 463) と呼ばれる線を含む直線を「西の線」に接するまで引き、メリーランド北東の境界を画定する。東へは「西の線」の始点（プライアントの農地内にある）からデラウェア川まで “the East Line” (MD 629) を引く。そしてアメリカを越えて、デラウェア湾から “the Spanish Extremadura” まで大西洋上に “Sea-Line” を “inscribe” (MD 712) することまで考える。メイスンとディクソンが関係するこれらの直線はアメリカの地に引かれた最初の直線ではない。たとえばチェリコークのいう “the Stupidity of Kings” (MD 336) を發揮して “Charles [III] and James [III]” (MD 337) が正確な地理学的知識もなくペンシルベニアの南の境界と定めた “the Forty-Degree

Line” (MD 337) が一つの主要な原因となり、メイスンとディクスンは彼らの直線をアメリカに引くこととなったのである。Iroquois 族も “Meridian Lines” (MD 648) を境界線としていた。

V-2 ロケットが発射される方角もまた西に限らない。“The Rocket was fired southward, westward, eastward” (GR 706). 北 (“000°: true North” [GR 707]) へは、“the logic of mandalas” (GR 707) に基づき V-2 ロケット 00000 号が発射されたとされる。ただし 00000 号以外にも、北へ向けては Blizna からの発射実験が行われている。目標地域である Sarnaki の中心地点でロケットを待ちながら、ペクラーは南へと双眼鏡を向ける (“pointing his binoculars south toward Blizna” [GR 424]) のである (Thomas Gwenthidwy によれば “the 1944 Blizna firings” の方向は “eastward” [GR 707] であるが)。ロケットの発射方向だけでなく、同じく四方位へと伸びるメイスンとディクソンの直線もまた「マンダラ」を形作っているといえるだろう。

引用文献

- Adams, Henry. *The Education of Henry Adams. Henry Adams: Novels, Mont Saint Michel, The Education*, edited by Ernest Samuels and Jayne N. Samuels, Library of America, 1983, pp. 715-1192.
- Baumgardt, Carola. *Johannes Kepler: Life and Letters*. Philosophical Library, 1951.
- Brooke, John Hedley. *Science and Religion: Some Historical Perspectives*. Canto Classics ed., Cambridge UP, 2014.
- Copernicus, Nicholas. *On the Revolutions*. Edited by Jerzy Dobrzycki, translated by Edward Rosen, Johns Hopkins UP, 1978.
- Cowart, David. *Thomas Pynchon and the Dark Passages of History*. U of Georgia P, 2011.
- Culture and Cosmos: A Journal of the History of Astrology and Cultural Astronomy*. Vol. 14, nos. 1-2, spring/summer-autumn/winter 2010, www.cultureandcosmos.org/issues/vol14.php.
- Dewey, Joseph. “The Sound of One Man Mapping: Wicks Cherrycoke and the Eastern (Re)solution.” Horvath and Malin, pp. 112-31.
- Drake, Stillman, translator. *Discoveries and Opinions of Galileo*. Anchor Books, 1957.
- Finocchiaro, Maurice A., editor and translator. *The Galileo Affair: A Documentary History*. U of California P, 1989.
- Gingerich, Owen. “Kepler, Johannes.” *Dictionary of Scientific Biography*, Charles Coulston Gillispie, editor in chief, vol. 7, Charles Scribner’s Sons, 1973, pp. 289-312.
- Horvath, Brooke, and Irving Malin, editors. *Pynchon and Mason & Dixon*. U of Delaware P / Associated UP, 2000.
- Hume, Kathryn. “Mason & Dixon.” *The Cambridge Companion to Thomas Pynchon*, edited by Inger H. Dalsgaard et al., Cambridge UP, 2012, pp. 59-70.

- . “The Religious and Political Vision of Pynchon’s *Against the Day*.” *Philological Quarterly*, vol. 86, nos. 1-2, winter-spring 2007, pp. 163-87. *ProQuest*, www.proquest.com/scholarly-journals/religious-political-vision-pynchons-against-day/docview/211154558/se-2?accountid=16714.
- Hungerford, Amy. *Postmodern Belief: American Literature and Religion since 1960*. Princeton UP, 2010.
- Kepler, Johannes. *Mysterium Cosmographicum [The Secret of the Universe]*. Translated by A. M. Duncan, Abaris Books, 1981.
- Kooy, J. M. J., and J. W. H. Uytendogaart. *Ballistics of the Future: With Special Reference to the Dynamical and Physical Theory of the Rocket Weapons*. Technical Publishing Company H. Stam, [1946].
- Lubbock, Constance A., editor. *The Herschel Chronicle: The Life-Story of William Herschel and His Sister Caroline Herschel*. 1933. Cambridge UP, 2013.
- McClure, John A. *Partial Faiths: Postsecular Fiction in the Age of Pynchon and Morrison*. U of Georgia P, 2007.
- . “Postmodern/Post-Secular: Contemporary Fiction and Spirituality.” *MFS Modern Fiction Studies*, vol. 41, no. 1, spring 1995, pp. 141-63. *Project Muse*, <https://doi.org/10.1353/mfs.1995.0005>.
- Motte, Andrew, translator. *Sir Isaac Newton’s Mathematical Principles of Natural Philosophy and His System of the World*. Motte’s translation revised by Florian Cajori, U of California P, 1962. 2 vols.
- Newton, Isaac. *Opticks or a Treatise of the Reflections, Refractions, Inflections and Colours of Light*. Dover Publications, 1979.
- Pynchon, Thomas. *The Crying of Lot 49*. J. B. Lippincott, 1966.
- . *Gravity’s Rainbow*. Viking Press, 1973.
- . “Is It O. K. to Be a Luddite?” *The New York Times Book Review*, 28 Oct. 1984, pp. 1+.
- . *Mason & Dixon*. Henry Holt, 1997.
- . *V. J. B.* Lippincott, 1963.
- . *Vineland*. Little, Brown, 1990.
- Scott Coe, Justin M. “Haunting and Hunting: Bodily Resurrection and the Occupation of History in Thomas Pynchon’s *Mason & Dixon*.” *The Multiple Worlds of Pynchon’s Mason & Dixon: Eighteenth-Century Contexts, Postmodern Observations*, edited by Elizabeth Jane Wall Hinds, Camden House, 2005, pp. 147-69.
- Strandberg, Victor. “Dimming the Enlightenment: Thomas Pynchon’s *Mason & Dixon*.” Horvath and Malin, pp. 100-11.
- Turnbull, H. W., editor. *The Correspondence of Isaac Newton*. Vol. 3, Cambridge UP, 1961.

Weisenburger, Steven C. *A Gravity's Rainbow Companion: Sources and Contexts for Pynchon's Novel*.

2nd ed., U of Georgia P, 2006.

Westfall, Richard S. *Never at Rest: A Biography of Isaac Newton*. 1980. Cambridge UP, 1983.

ラゲ、エ訳『イエズス・キリストの新約聖書』中央出版社、1959年。

What the “Star-Gazers” See: Science and Religion in *Mason & Dixon*

Takayoshi ISHIWARI

If religion signifies the antithesis of science, due attention has been paid to the religious aspects of Thomas Pynchon’s *Mason & Dixon*. But a careful look at the scientific activities of its two protagonists, who are Christian “Star-Gazers,” makes it impossible to view science and religion in this postmodernist historical novel as antithetical to each other. When Charles Mason and Jeremiah Dixon observe or “gaze” at the transit of Venus, they see more than a planet crossing the sun’s disk: they see “our Creator about his Work.” Pynchon’s astronomers, turning their eyes through the telescope to the heavens, are not exceptional in seeing God behind natural phenomena. Galileo, Kepler, and Newton, the three scientists the transit recalls to Dixon, did the same. “[T]he glory and greatness of Almighty God,” Galileo says in *Letter to the Grand Duchess Christina*, “are marvelously discerned in all his works and divinely read in the open book of heaven.” The aim of Kepler’s 1596 *Mysterium Cosmographicum* was to discover “God’s motive and plan for creating [the universe].” And in *Mathematical Principles of Natural Philosophy* Newton attributes the order of the world to God, saying, “This most beautiful system of the sun, planets, and comets, could only proceed from the counsel and dominion of an intelligent and powerful Being.” As far as astronomy and God are concerned, science and religion in *Mason & Dixon* are far from antithetical; they are as congruent with and inseparable from each other as they were with Galileo, Kepler, and Newton (although there is a case where religion does seem to resist scientific reasoning: Mason finds himself at a loss how to interpret the resurrection of the dead while reading a chapter from 1 Corinthians). But while stargazing renders “Him that regulates the movements of the Heav’ns” visible, no such thing happens when it comes to politics. “[S]omething invisible’s going on [. . .],” says Dixon paranoically, not knowing what or who is behind their commission to run a straight boundary line in America. They are “Men of Science” who are “but the simple Tools of others” and incapable of seeing through their game. This suggests that they are of the same kind as rocket engineer Franz Pökler in *Gravity’s Rainbow*, another “Star-Gazer” who dreams of flying to the moon: he likewise becomes paranoid about the intention of his sadistic employer. Unlike Pökler, however, who thinks he is “invading Gravity itself,” the

men of science in *Mason & Dixon* recognize God “from the book of nature” (to borrow a phrase Kepler used in a letter to his former teacher). Focusing on what the pair of “Star-Gazers” see not only reveals that science and religion are part of the same larger metaphysical project in *Mason & Dixon*. It also enables us to realize that the compatibility of science with religious faith makes the two novels distinct from each other despite what they have in common.